佛教大学大学院紀要　第31号（2003年３月）

過疎地域におけるボランティア精神の変化と実態

―「結」が果たしてきた役割を中心として ―

三　好　達　也

〔抄　録〕

今日、日本におけるボランティアは地縁関係を中心とした従来の互助的なボランティアから個人の興味・関心によっておこなわれるものへと変化している。そこで、依然として根強い地縁関係をもつコミュニティである一方で「世界遺産」に登録され、観光地化されている「白川郷・五箇山の合掌造り集落」に焦点をあて、「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」指定から「世界遺産」登録後のボランティアに関する意識変化について調査し、過疎地域のおけるボランティア精神の特色やその変化について、萱葺きの葺き替えや冠婚葬祭などの互助的な慣習である「結（ゆい）」の果たしてきた役割を中心に考えてみたい。

調査方法としてはインタビュー調査を用いた。テンニースの理論をもとにした分析の結果、「結」を中心とした互助的なボランティアと観光客を対象とするボランティアが混在していることが明らかになった。つまり、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」におけるボランティア精神はゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行しつつあり、そこには「結」によって互助関係は継続され、観光地化によって近代化が進むことで独特なボランティア精神を形成しているといえる。

キーワード：結，世界遺産，重要伝統的建造物群保存地区，史跡，
ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト

はじめに

日本におけるボランティアは律令制、五人組といった制度的なものや農作物の収穫を互いに手伝うといった地縁関係による互助的なボランティアや宗教的な慈善活動が古くからおこなわれていた。宗教的な側面からみると法隆寺や四天王寺は宗教施設と同時に学問の施設であり、福祉の施設であった。これを建てた聖徳太子は民間人ではないが、ボランタリーな活動の最初

の担い手であったといえるかもしれない[1)]。しかし、日本において、宗教的な慈善活動は一貫していないものであったことから、主として、現在のボランティアは制度的なものの影響を強く受けているといえるのではないか。

今日のボランティアをみると地縁によるものから個人の興味・関心によるものへと変化している。社会が近代化するにつれて、地縁によるつながりは薄れ、「個」による意思決定が最優先となってきたといえよう。

テンニースは、近代化が進むにつれて、人間意思の完全な統一のみられる自然的な人間結合であり、本質的に結合し続ける「ゲマインシャフト」から、目的意識的な人為的な結合であり、互いの利益と目的に基づいて、あらゆる結合にもかかわらず本質的には分離している「ゲゼルシャフト」[2)]へと移行すると説明した。このテンニースの理論の視点からボランティアの変化をみると社会の近代化による変化と類似していることがわかる。特に、地縁関係が希薄化した都市部においては、「地縁集団」を気にすることなく、「個」を優先にすることからボランティアとテンニースの理論を関連づけることができるのではないだろうか。

しかし、近代化が進む我が国においても近代化のスピードが都市部に比べると、明らかに緩やかな過疎地域が存在している。過疎地域は、地理的条件などさまざまな理由から産業が興りにくい地域である。したがって、若者たちは働く場所がなく、都市に流出することが多くなり、結果として、過疎地域に残るのは高齢者がその大半を占めることとなる。また、都市に出た若者たちは、都市で家庭をもち、過疎地域に戻ってくることは比較的少ない。若者が減るということから誕生してくる子どもの数も減り、新たな労働力や産業が育ちにくい環境になる。つまり、都市化をすすめる層や新たな文化や慣習をうみだす世代が不在の状態になりつつあるのである。これらのことを総合的に考えると、過疎地域におけるさまざまな文化や慣習はそれらを新たにうみだす世代が不在のため、高齢者による従来の文化や慣習が継続されることで変化しにくいのではないか。また、ボランティアにあてはめて考えてみると、過疎地域は、今日の日本において、一般的となっている個人の興味・関心によるボランティアではなく、従来の互助的な地縁関係を中心としたボランティアが現在も残っているのではないかと考えられる。

そこで本論文では、過疎地域であるが、依然として根強い地縁関係をもつコミュニティである一方で「世界遺産」[3)]に登録され、観光地化が進む「白川郷・五箇山の合掌造り集落」[4)]に焦点をあてたい。古くからの伝統文化をもち、地縁による互助組織である「組」を中心として、「結」[5)]の慣習を現在まで続けてきた。このような特徴をもつ地域において「重要伝統的建造物群保護地区」[6)]及び「史跡」[7)]指定から「世界遺産」登録以降のボランティアに関する意識変化について調査し、過疎地域のおけるボランティア精神の特色やその変化について「結」の果たしてきた役割を中心に考えてみたい。

そして、「重要伝統的建造物保存地区」及び「史跡」に指定されることで、「結」をはじめと

する互助的な地縁関係は維持され、「世界遺産」に選定されることによって、「結」だけではなく、観光客を対象としたボランティアがあらわれてくるのではないか。さらに、観光客が増えることでゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行するのではないだろうかということを仮設とし、過疎地域である「白川郷・五箇山の合掌造り集落」においてもゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行をしていることに注目しながら、この地域の特性からくる特有の意識変化についても明らかにしていきたい。

調査方法としてはインタビュー調査を用い、テンニースの理論をフレームワークとし、考察を進めていきたい。

１．テンニースの理論からみるボランティアの機能変化

テンニースは、近代化が進むにつれて、成員が互いに感情的に融合し、全人格をもって結合する社会である「ゲマインシャフト」から、成員が各自の利益的関心に基づいてその人格の一部分をもって結合する社会である「ゲゼルシャフト」へと移行すると説明した。つまり、近代化によって、地縁による共同体において逃れられない互助的な関係から、個人の利益や打算などの共通した一部分によって結ばれている関係と変化するのである。

このようなテンニースの理論を用いてボランティアの変化をみてみたい。日本における一般的なボランティアは、律令によって、「老人や病人の介護は近親者が行い身寄りのない人や障害者の世話は坊里すなわち近隣で行うことが義務づけられていた」[8)] ところからはじまったといえよう。これらの流れをくんで、五人組のような当時の政治によって形成された地縁関係は、租税を納めるためであったり、相互監視、連帯責任の関係が存在していた。制度化され、よい意味でも悪い意味でも地縁関係によって、互いに助け合う互助的な関係が生まれたのである。

江戸時代が終焉を迎え、相互監視であったり連帯責任という制度による縛りは減少していったが、地縁関係も依然として強く存在し、生活していくためには必要不可欠なものであるため、その関係は受け継がれていた。また、都市部などでは地縁よりも関係が緩やかな地域関係や商人による奉仕活動がみられるようになってきた。

大正時代には各地に新たな地方財閥が育ち新しい時代感覚でそれぞれの地域に財団を設立[9)]し、奨学基金の設立などをメインとしたものも出現した。都市部や各地方において、財団が育つことで奨学基金が設立され、社会貢献がなされた。

第二次世界大戦下においては、企業や町内会などによるさまざまなボランティアは国家に対する奉仕としてみなされていた。戦後は、GHQによって地縁組織は禁止されていたが、個人の意思決定によって選択することができる市民参加型のボランティア組織が形成され始める。

高度経済成長を迎える頃には、さまざまな分野で技術革新がおこり、急激に近代化が進んでいった。近代化した都市部には地方から就職で多くのものが流入してきた。そして、その周辺

では、ニュータウンと呼ばれるマンション群がつくられていくとこととなる。ニュータウンに移り住む人々はさまざまな地域から集まったもので構成さている。それぞれがもつ文化や習慣が違うということから共通点が少なく、日常生活においても地域との関わりをもたなくても支障がなく生活できることやマンションのもつ独特な閉鎖性からも従来のように深い地縁関係を形成することが困難であった。町内会や自治会などの存在はあるものの、前述したような背景から、近隣の人々と協力する必要性が低下したといえるであろう。このようなことから、近隣との協力という組織的な互助の関係に縛られなくなることで、ボランティアをおこなう決定権は個人へと移行していくこととなる。

さらに、1980年代後半から1990年代にかけ、企業はボランティア休暇をはじめとする社会貢献の一環としてボランティアを推進しはじめるようになった。また、市民グループも独自の活動を展開しはじめるようになりつつあった。しかしながら、市民グループの活動に関しては一般化されたものではなかった。市民によるボランティア活動が注目されるようになったきっかけとして、阪神淡路大震災があげられる。また、阪神淡路大震災を期に個人のなかにボランティアに対する興味・関心が集まり、それぞれ自分にあったボランティアを探し、活動しはじめることで、社会全般に本格的なボランティアという意識や概念が生まれたのではないかと考えられる。

阪神淡路大震災を契機に多くのNPOやボランティア団体が多く誕生することとなり、ボランティア元年ともいわれることとなった。これによって、従来のように地縁による互助的な基礎集団からより、個人の興味・関心にあったボランティア探しをはじめるようになったのである。言い換えると、ゲマインシャフトから大震災という衝撃をうけることで、ゲゼルシャフトへと移行したともいえるであろう。では、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」において、「世界遺産」に登録されることによるインパクトはゲゼルシャフトへと移行をするほどのインパクトをあたえたのであろうか。

このようにボランティアは古くは地縁による制度化されたの互助の関係から始まり、より広い地域にまたがった活動へと変化した。さらには企業の社会奉仕であったり、国家施策の中心を担うこととなったりした後、市民活動などへと変化をとげてきた。ボランティアは社会が近代化する過程において大きな変化をとげてきた。テンニースのいうようにゲマインシャフトから日本社会が近代化することで、ボランティアもより、個人の選択決定、利益を優先とするゲゼルシャフトへと移行したといえるのではないだろうか。同様にボランティア精神も互助的なものから個人の興味・関心をもとにした自主的、自発的な精神へと変化していったといえるであろう。

２．ボランティアの定義の変化

前述してきたように、その時代によってボランティアは変化し続けてきた。制度化された互助の関係からはじまり、今日のように個人の興味・関心によって、選択決定することが可能なボランティアへと移行した。では、この変化の過程からボランティアの定義を考えてみるとどのようなものであろう。

では、一般的にいわれるボランティアの定義はどのようなものだろうか。入江幸男（2000）は個人のボランティア活動の基本条件として、「自主性」、「無償性」、「公益性」の３つをあげている。また、この３つは、どれがかけても、その行為がもはやボランティアとは言えなくなるような不可欠な条件であるとともに、この３つがそろっていれば、それはボランティア活動である[10]ということから、「自主性」、「無償性」、「公益性」がボランティアにおける定義であると考えることができるであろう。

しかし、これをボランティアのはじまりと考えられる律令制下にあてはめてみると「無償性」、「公益性」はあてはまるが、根本は制度によっておこなわれていることから考えると「自主性」はあてはまらない。

次に明治後期から大正にかけて活発であった財閥の社会奉仕について考えてみる。財閥による社会奉仕はこれら3つの柱を満たしているものの、裕福な人から恵まれない人への施しという色合いが強い。したがって、3つの柱は満たしているが、個人が自主的におこなっているものではないため、一般的に考えられるボランティアとは違ったものである。

また、今日、３つの柱とは大きく形の異なったボランティアの出現や人々の意識的な側面からも変化がみられている。「自主性」に関してみると、就職や受験のために活動をする、「無償性」に関しても交通費や若干の金銭を受けとる有償ボランティア[11]を求めるものの増加という現象、「公益性」においては、大きな社会に対しておこなうものばかりではなく、ある一定を対象としておこなわれるボランティアが多くみられるようになっている。また、従来は常識と思われていた倒れている自転車を起こす、空き缶を拾うなど「ちょボラ」[12]と呼ばれる形態のボランティアまで登場している。

これらのボランティアの根本には個人の興味・関心や利益が強くみられ、地縁とは離れたまったくの個人による意思選択のよって決定づけられるゲゼルシャフトの状態にあるといえるのではないだろうか。

３．「白川郷・五箇山の合掌造り集落」におけるボランティア精神の変化と実態

（１）調査概要

ここまで述べてきたように、社会変動とボランティアは連動しているといえる。しかし、こ

れまで述べてきたものは、主に都市部における変化である。地域特性などから過疎になった地域ではどのような変化をしているのだろうか。そこで、過疎地域でありながら、「重要重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」指定や「世界遺産」に登録され、近代化が進んでいる「白川郷・五箇山の合掌造り集落」を調査対象とした。

調査期間は2002年９月８日から10日までの３日間で、調査方法としてはインタビュー調査を用い、小学生、高校生及び一般住民を対象とした。

それをもとにテンニースの理論をフレームワークとし、過疎地域である「白川郷・五箇山の合掌造り集落」においてもゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行をしているのかということをみながら、この地域の特性からくる特有の意識変化についても明らかにしていきたい。

そして、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」指定や「世界遺産」に登録されることによるボランティアに関する意識変化を調査し、過疎地域のおけるボランティア精神の特色やその変化について「結」の果たしてきた役割を中心に考えてみたい。

本研究は佛教大学教育学部助教授原清治との共同研究による調査をもとに考察したものである。

（２）地域特性

今回、調査の対象とした「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は、荻町集落、相倉集落、菅沼集落の３つの集落からなっている。それぞれが文化財保護法第２条および第83条により「重要伝統的建造物群保存地区」[13] に指定されている。そのうち、相倉集落、菅沼集落においては1970年に同法第69条によって、国の「史跡」指定をうけている。また、「合掌造り」[14] や「こきりこ節」[15] をはじめとして、さまざまな伝統文化を継承しており、1995年には「世界遺産」に登録された地域である。

周囲を山々に囲まれ、非常に厳しい環境であったため、互助的な意識が非常に強くもたれ、江戸時代より近隣の家々によって構成された「組」は現在まで続く、象徴的な組織である。本論文で注目する「結」とは「白川郷・五箇山の合掌造り集落」におけて古くから伝承されている地縁による相互扶助の慣習のことであり、「組」を基本としておこなわれてきた。主に冠婚葬祭や萱葺き屋根の葺き替え時などに有効的に機能した。

人口については最盛期の４分の１程度まで減少し、65歳以上の高齢者が約３割に達しており、高齢社会を迎えている。

（３）「白川郷・五箇山の合掌造り集落」におけるボランティア精神の変化と実態

調査から得られたデータをもとに、「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」指定と「世界遺産」に登録されることで生じた地域社会の変化を踏まえ、ボランティア精神の変化と実態

について述べていきたい。そして、本論文のキーワードでもある「結」にポイントを置いたものを中心に述べていく。

⒜「重要伝統的建造物群保存地区」指定と「世界遺産」登録による地域社会の変化

【インタビュー対象者：民宿女将Ａさん（女性）】

筆　者：女将さんの小さい頃から比べるとこのあたりは変わりましたか。

Ａさん：そうやねぇ、かわったね。車も多いし、人も多くなったしねぇ。

筆　者：それはいつ頃からですか。

Ａさん：やっぱり、「世界遺産」に選ばれてからちがいますか。まえ、なんか国が指定してたやろ。その時はほんとに興味がある人しかこなかったもん。

筆　者：生活などで変化したところはありますか。

Ａさん：うちらは観光客相手だからいいけど、合掌造りに住んでる人は大変よ。観光客に生活みられるし、住みにくくてもなんにもいじれないでしょ。

【インタビュー対象：合掌の里職員Ｂさん（男性）】

筆　者：Ｂさんが小さい頃から比べるとこのあたりは変わりましたか。

Ｂさん：変わったよぉ。僕たちが小さい頃なんてなんにもなかった。今は高速できたり、冬でも車走ったりできるけど、昔はぜんぜんだめでしたね。

筆　者：特に変わったと思われたのはいつ頃ですか。

Ｂさん：やっぱり「世界遺産」になってから観光客がいっぱい来るようになってからかな。昔は鍵も閉めなくてよかったけど、最近はねぇ。

この地域において、地域社会に影響をあたえたものとしてふたつあげることができる。ひとつは「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」指定ともうひとつは「世界遺産」として登録されたことである。

文化財保護法によって「重要伝統的建造物群保存地区」として指定をうけた。これによって、数が減り続けてきた「合掌造り」が保護されることとなった。特に相倉集落と菅沼集落ではそれ以前に「史跡」に指定され「合掌造り」だけでなく、周辺の環境まで含めて、ひとつの文化財とされ、社会が近代化するなか、その集落は住居だけでなく、環境まで変化させてはならないとされた。

もうひとつの「世界遺産」登録にあたっては、観光地化という「合掌造り」や環境を守り続けてきた地域社会に近代化された都市から多くの観光客がおとずれることになった。

Aさんがいうようにそれまで自由に生活をしてきたが「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」に指定されたことによって、住民の生活はさまざまな制限を加えることになったといえるだろう。一方、「世界遺産」においては、生活面では制限を今まで以上にかけられるというこ

とはないが、２人のインタビューからもわかるように観光地化によって、大量の観光客がこの地域を訪れることで、畑を荒らされたり、家の中をのぞかれるなど、日常生活に支障をきたすようになっている。

地域社会において、「重要伝統的建造物群保護地区」及び「史跡」指定と「世界遺産」登録のふたつには大きな変化をもたらしたといえるだろう。しかし、このふたつでは地域社会に与えた影響の方向性は違ったものではないだろうか。「重要伝統的建造物保護地区」及び「史跡」指定は、減少する文化遺産を保護し、その周辺の環境もそのままにするという物理的な保護がおこり、近代化のスピードを遅らせたと考えることができるのではないだろうか。一方、「世界遺産」登録は観光客が大量に訪れることによって、施設の整備や高速道路の整備などが進み、都市化が進むきっかけ作りになったのではないだろうか。

⑹「白川郷・五箇山合掌造り集落におけるボランティア精神の変化と実態

【インタビュー対象者：小学校教員Ｃ先生（男性）】

筆　者：この地域でボランティア活動はどのようなものがありますか。

Ｃ先生：そうですね、ボランティアっていうかわかりませんが、ここら辺は古くから「結」っていうものがありまして。そういうのが主ですかね。

筆　者：現在も昔のように残っているのですか。

Ｃ先生：昔のようにではないですけど。やはり、お葬式のとき大きな花を造るんですがそういうのはすごいですね。

筆　者：現在、ボランティアという言葉をよくお聞きになると思いますが、こちらではそのような組織や活動などはおこなわれていますか。

Ｃ先生：年２回くらい、地域の人みんなでゴミ拾いとかしますね。あとは、あるとしても婦人会や青年団とかからの要請でなんかしたりですかね。

【インタビュー対象：合掌の里職員Ｂさん（男性）】

著　者：この地域でボランティア活動はどのようなものがありますか。

Ｂさん：ボランティアねぇ。昔は「結」っていって合掌造りの屋根の萱葺きとかあったけどね。

著　者：今はないのですか。

Ｂさん：う～ん。今は森林組合がやってるし、保険とかいろいろあるから昔みたいに「お互い様」っていう雰囲気じゃなくなってきたかもね。やっぱりほとんどの人が、合掌造りに住んでないもんねぇ。

著　者：他にボランティア活動はないのですか。

Ｂさん：そうやねぇ、やっぱりこきりこ節とか伝統文化を来た人に見てもらうみたいなもんとかかなぁ。

この２人のインタビューから、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」におけるボランティアの現状についてみると、観光地化によってより、必要性が増してきた伝統文化に関するボランティアとやはり旧来からの「結」の存在が大きいことがわかる。観光客を対象としたボランティアは、伝統文化を保護するだけでなく、「観光」という利益をうむものに対しておこなっていることから、互助的な要素からみると「結」とはまったく異なったものであるといえる。

冠婚葬祭や萱葺き屋根の葺き替えを主としてきた「結」は冠婚葬祭の部分に関しては、依然として、残っているといえよう。萱葺き屋根の葺き替えについては、高齢化や事故が起こった際の責任問題、合掌造りの絶対数の減少から、萱葺き屋根の葺き替えという慣習が衰退していったといえるだろう。しかし、現在も地域住民によって構成される婦人会や青年団を中心とし、住民全員参加の行事的なわれており、他のインタビュー対象者からも「みんなが住むところだから、みんなできれいにしないとね」など互助的な要素をもったボランティア活動も存在している。萱葺き屋根の吹き替えという慣習が衰退していく一方、時代にあった地縁関係によるボランティアも誕生してきているのである。

ボランティア精神の変化について注目すべき点は、Ｂさんが萱葺き屋根の葺き替えをおこなうにあたって、「保険」という発言をおこなったことだ。従来は、葺き替えに参加していた人々の互助の精神が強くあったため、事故がおこった時にも個人の責任という意識が強かった。しかし、今日では、責任を誰がもつのかということが問題になるのである。「結」という慣習と「合掌造り」という文化遺産を守るための「仕事」であり、さらには多くの人々は「合掌造り」に住んでいないため、互助的な色合いは非常に薄くなっているのである。

つまり、「合掌造り」という古くからの伝統文化を受け継いできた人々の意識の中にも互助関係によるつながりとしてではなく、伝統文化を保護しなくてはならないという責任と観光地化による近代化によって、「結」の慣習が守られているのである。このことから、現在の萱葺きの葺き替えに関しては、古くから伝わる「結」の慣習の特徴である互助の精神からくるものは薄れつつあるといえよう。婦人会や青年会からの要請によって住民が協力してさまざまな活動をおこなったり、よっぽどのことがない限り、住民全員が参加するゴミ拾いが存在することから、新しい形態の「結」が生まれたといえるのではないだろうか。

４．まとめ
―テンニースの理論からみた「白川郷・五箇山の合掌造り集落」のボランティア精神の変化―

前述したように、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は独特の形で近代化を進めてきた。それらの特徴をテンニースの理論を使い、考察してみたい。

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」において、「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」

指定をうけるまでは、都心部に比べ、遅れはしていたが都市化は進んでいた。

しかし、「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」に指定されることによって、近代化に進むのではなく、ゲゼルシャフトの社会を維持するという方向に移行した。「重要伝統的建造物群保存地区」及び「史跡」の視点からみると、指定がなされた頃の1970年代は高齢者比率も1割を少し超えた程度であり、地縁関係を維持することができる層も多く存在しており、文化財保護とそれにともなう義務を果たすためには、地縁による互助の関係を維持するボランティア精神が根強く維持されていたといえるだろう。

「世界遺産」に登録された1995年には地縁関係は維持されていたものの、高齢社会を迎え、互助的なボランティア精神は残っているが、実際に互助の関係を維持する層が減少することでその精神も薄くなっていかざるを得ない状況であったといえよう。

だが、「世界遺産」に登録されることで、観光客が多く訪れるようになった。観光地化されることで、資料館や街並みもきれいに整備され、互助的なボランティアではない観光客を対象としたボランティアが出現してきたのである。

これらから、「世界遺産」に登録されることでテンニースの理論であるゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行が本格的に開始されたと考えることができるだろう。また、「重要伝統的建造物地区」及び「史跡」指定から「世界遺産」登録までは緩やかな近代化、「世界遺産登録」以降は急速な近代化が進んでいるといえる。ボランティア精神の変化も同様に、観光地化という外的要因によって、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと移行しているといえるだろう。

しかし、地縁による「組」は現在も存在している。その慣習である「結」は確かに萱葺き屋根の葺き替えは「合掌造り」に居住する住民を中心とした一部でしか残っていない。だが、冠婚葬祭に関しては現在でも有効に機能している。さらには、婦人会や青年会など地域に根ざし、強い影響力をもった組織も存在し、新しい形態の「結」がうまれているといえる。

したがって、ボランティア精神は互助的な「結」の慣習の現状からみると、非常に緩やかなスピードはあるがゲゼルシャフトへと移行しつつあるといえるのではないだろうか。

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」のボランティア精神の実態として「結」をもとにした互助的な活動は依然として強く残っている。互助的な精神は高齢者が多く、また、彼らが地域とのつながりをもつことで、一定の互助の精神を維持し続けている。また、「世界遺産」によって、増加した観光客を対象としたボランティアもみられ、伝統文化の伝承と利益をあげるという側面ももっている。つまり、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」において、観光地化が進むことによって、緩やかなスピードでゲゼルシャフトへと移行しはじめたが、互助的な活動を必要とするものが存在していることから、文化財保護と近代化のバランスをとりながら、独特のボランティア精神を形成しているといえるのである。

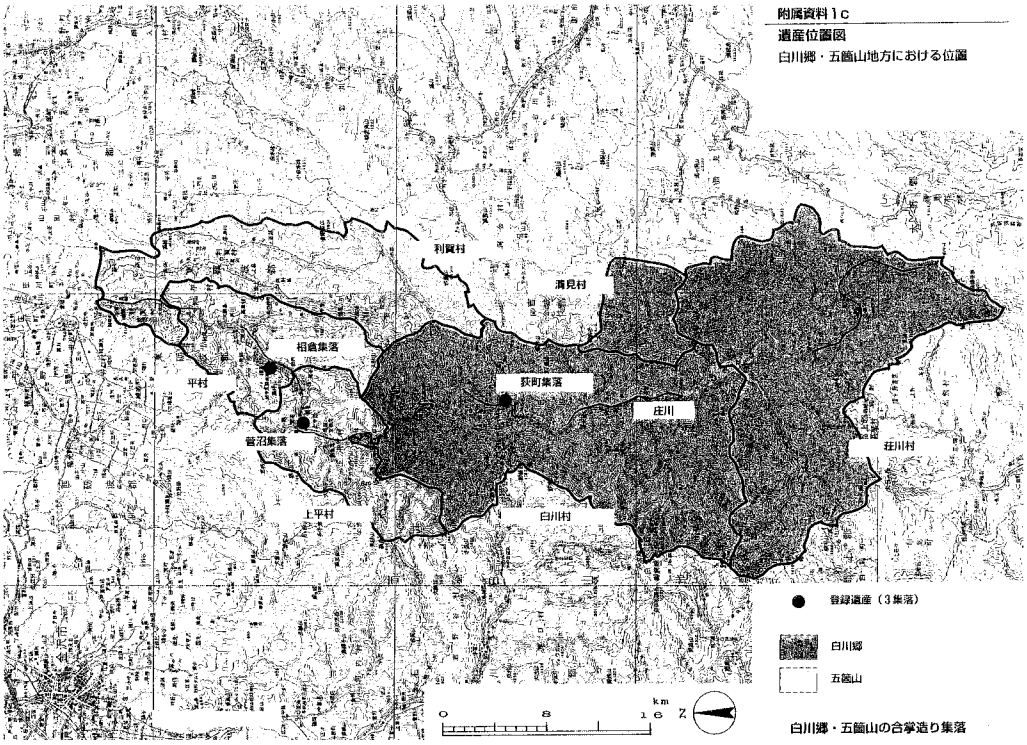
〔注〕

（１）内海成治・入江幸男・水野義之編「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社，1999，ｐ26

（２）日本教育社会学会「新教育社会学辞典」東洋館出版，1986，Ｐ258

（３）現代を生きる世界のすべての人々が共有し、未来の世代に引き継いでいくべき人類共通の財産を示す。優れた不変的な価値をもつ建築物や遺跡などを文化遺産、優れた価値をもつ地形や生物、景観などを有する地域を自然遺産、文化と自然両方の要素を兼ね備えているものを複合遺産の３種類がある。

（４）荻町集落：岐阜県大野郡白川村，相倉集落：富山県東砺波郡平村，菅沼集落：富山県東砺波郡上平村。



出典：斎藤英俊監修「白川郷・五箇山の合掌造り集落」合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会，1996，P83

（５）冠婚葬祭や家屋の普請、茅葺き屋根の葺替え時などに行なわれる相互扶助の伝統的慣習。

（６）文化財保護法第2条、第83条により、指定された。

第２条　この法律で「文化財」とは、次に掲げるものをいう。

建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの（これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む。）並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料（以下「有形文化財」という。）

② 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高

いもの（以下「無形文化財」という。）

③ 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの（以下「民俗文化財」という。）

④ 貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び波来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で我が国にとって学術上価値の高いもの（以下「記念物」という。）

⑤ 周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの

第83条　文化庁長官は、左の各号の一に該当する場合において、前条の報告によってもなお史跡名勝天然記念物に関する状況を確認することができず、且つ、その確認のため他に方法がないと認めるときは、調査に当る者を定め、その所在する土地又はその隣接地に立ち入ってその現状又は管理、復旧若しくは環境保全の状況につき実地調査及び土地の発掘、障害物の除却その他調査のため必要な措置をさせることができる。但し、当該土地の所有者、占有者その他の関係者に対し、著しい損害を及ばす虞のある措置は、させてはならない。

（７）第69条　文部大臣は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。

２　文部大臣は、前項の規定により指定された史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡、特別名勝又は特別天然記念物（以下「特別史跡名勝l天然記念物」と総称する。）に指定することができる。

３　前二項の規定による指定は、その旨を官報で告示するとともに、当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所有者及び権原に基く占有者に通知してする。

４　前項の規定により通知すべき相手方が著しく多数で個別に通知し難い事情がある場合には、文部大臣は、同項の規定による通知に代えて、その通知すべき事項を当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所在地の市町村の事務所又はこれに準ずる施設の掲示場に掲示することができる。この場合においては、その掲示を始めた日から２週間を経過した時に前項の規定による通知が相手方に到達したものとみなす。

５　第１項又は第２項の規定による指定は、第３項の規定による官報の告示があった日からその効力を生ずる。但し、当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所有者又は権原に基く占有者に対しては、第３項の規定による通知が到達した時又は前項の規定によりその通知が到達したものとみなされる時からその効力を生ずる。

６　文部大臣は、第１項の規定により名勝又は天然記念物の指定をしようとする場合において、その指定に係る地域が自然環境の保護の見地から価値の高いものであるときは、環境庁長官の意見を聞かなければならない。

（８）内海成治・入江幸男・水野義之編「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社，1999，P24

（９）同書，P31

（10）前掲書，P４

（11）交通費や活動に関わる費用、若干の金銭を支給するボランティアのこと。

（12）ちょっとしたボランティアの略。AC（公共広告機構）などにより、身近で手軽なボランティアとして注目が集まっている。

（13）荻町：1976年、相倉、菅沼：1994年指定。

（14）小屋内を積極的に利用するために、叉首構造の切り妻実とした萱葺きの家屋。
斎藤英俊監修「白川郷・五箇山の合掌造り集落」合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会，1996，P66引用。

（15）富山県東砺波郡平村に伝誦される祭り唄。中世の後半から近世にかけて台頭した、民族芸能の「田楽法師」や「放下僧」の所作及び地唄の一部が土着固有化した神事芸能。
五箇山で使用される「ササラ」には「棒ザサラ」（摺籠）と「びんささら」がありこの「びんささら」は四苦三十六枚から八苦七十二枚そして毒苦五十四の倍数百八の煩悩を打ち払うとの伝説もある。いずれにしても日本民謡の中では最も古い歴史をもつ唄の一つといわれている。

〔参考文献〕

（１）小澤亘編「ボランティアの社会学」世界思想社，2001

（２）内海成治編「ボランティア学のすすめ」昭和堂，2001

（３）野尻武敏・山崎正和他「現代社会とボランティア」ミネルヴァ書房，2001

（４）内海成治・入江幸男・水野義之編「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社，1999

（５）齋藤英俊「世界遺産　白河郷・五箇山の合掌造り集落」，1996

（６）新明正道・鈴木幸壽「現代社会学のエッセンス〔改訂版〕」ペリカン社，1996

（みよし　たつや　　教育学研究科生涯教育専攻修士課程）
（指導教授：原　清治助教授）

2002年10月16日受理